

さくら新聞

発行者：NPO法人
下関深坂さくら友の会
下関市安岡町1-8-3
TEL:083-258-0143
FAX:083-258-5910
http://yasuokac.sakura.ne.jp/sakura
Eメール: misaka.sakura@arrow.ocn.ne.jp

年頭のあいさつはー「維持管理」ー

1月12日、寒い朝だったが、深坂の森に38名が集めた。皆やる気満々に見える。整列したところ

は、桜の木と各人の健康の『維持管理』で行きましよう。という簡単な挨拶だった。福富氏は年末働きすぎたのと、飲みすぎたので体調を悪くし、医者にかかったところ、「年相応に、酒もボランテアもほどほどにしときなさい」と言われたらしい。流石に挨拶では「ボランテアもほどほどに」とは、冗談でも言えなかったようだ。みなさん、理事長の言葉を有難ううけたまわって、身体を労わりつつ、桜の維持管理に励みましよう。(記念写真。既に作業中で写らなかった人もいる)



会長に選任され、司会を任された和泉昭夫氏の声が響いた。進み出た理事長の顔に注目が集まる。「今年



みなで記念写真を撮っている間も、藤原さんは商売道具のユニック車を操作しながら、天狗巢の罹患枝を除去していました。



肥料は、油粕、鶏糞と土壌改良材のバーク(木皮)。植えておきさえすれば、後は放っておいても育つと思っている人も多いと思うが、肥料をやるとやらないでは大違い。肥料をやらないと、何年経っても太くならない。日当たり、深く耕せないなど、他の条件もあるが、育ちの悪い木ほど何とかしてやりたいと思う。



最後は温かい豚汁とぜんざい。塩こぶ、たくあん。そして白い握り飯。いつものことながら、同じ飯を食うということが心を開かせ絆を強めている。

若者の参加

11月9日

毎年、11月の定例作業には、下関市報などで一般市民参加を呼びかけている。この日は、家族での参加など一般参加者が7名、東亜大学から学生が8名の15名の初参加があった。全体の参加者は合計61名



初めての参加者のお目見え



室内にて受講

季節外れの寒さと雨の中、まずは森の家で、下関北消防署員から、救急救命処置の手ほどきを受けた。人工呼吸、心臓マッサージ、AEDの使用法など。その後、ゴミ集め、草取り、バ

ーベキューなど。
4頁に東亜大学生の感想文を特集しました。

11月5日理事会

副理事長、会員交流部会長の辞任と選任

上島政利副理事長が健康上の理由で、兼務の会員部会長とともに辞任願を提出し、理事長預かりとなっていたが、事務にも支障をきたす事態となってきたため、議題として取扱われた。辞任はやむなしとして承認された。後任には副理事長常岡梅男氏、会員交流部会長和泉昭夫氏を選任した。任期は、前任者の残りの期間とする。上島氏はユーモアを交えた名司会者だった。



前副理事長
上島政利



副理事長
常岡梅男



会員交流部会長
和泉昭夫

桜四方山

最近里山資本主義と言う言葉をよく聞く。TVでもよく取り上げられているようだ。日本総合研究所の藻谷浩介主席研究員が、NHK広島取材班とともに『里山資本主義』と言う本を出してよく売れているらしい。都市への人口集中から、少子化まで、現代の病は、資本主義の産物。その価値観を逆転させる発想の里山資本主義は、さくら友の会のみならず大いに共感できるだろう。藻谷氏の講演会が12月に川棚温泉で開催された。筆者と、松岡康成夫妻とで聴きに行った。地域の活性化に對するアドバイスが多く語られた。地方には、財産がいっぱいあるのだから、地方の人には、それが財産だとは気付かない。そこに住む人々にとつては当たり前のものだ。「空気がきれい」「水がおいしい」「夕日がきれい」。都会の人から見れば、地方の人たちは、皆保養地か、別荘地に住むうらやましい存在なのだ。若者にとって食えさえずれば、何も都市に出ていく必要はない。若者が地方で暮らせるように、働ける場所と子育ての援助しなければならぬ。Uターンが始まり、少子化も解消する。いつも思っていることだが。